

将軍、三職・七頭守護家の行末は？

室町時代

義満の幕府権力確立、
そして11年に渡る
「応仁の乱」、
農民・仏門「一揆」&
無頼「足輕」が初登場



年表帖

上

巻

「応仁元年の京都上京」地図、室町～戦国時代の日本地図、
関連城跡位置図、広域図、略系図 1 足利将軍家・鎌倉公方家、
2 斯波家、3 細川氏宗家（京兆家）、3-2 細川典厩家、3-3 細川野州家、
3-4 阿波守護家、3-5 淡路守護家、3-6 和泉上守護家、
3-7 和泉下守護家、4 足利一族の畠山家、5 山名惣領家、
6 山名氏伯耆守護家、7 山名氏因幡守護家、8 丹後一色氏、9 京極氏、
10 赤松氏惣領家、11 六角氏、12 若狭武田氏

明徳3年（1392）閏10月の3代将軍足利義満の「南北朝合一」にはじまり、「応仁・文明の乱」最中の文明5年（1473）の西軍大將山名宗全と東軍大將細川勝元の没までを時系列で記しました。

目次

「応仁元年の京都上京」地図……………	表2
はじめに～この本の使い方……………	2
目次年表……………	3～17
日本全図・関連城跡位置地図……………	18～21
各家略系図……………	22～35
室町時代年表帖(上巻)……………	36～230
あとがき、奥付……………	232

はじめに～この本の使い方～

この上巻は、3代将軍足利義満の南北朝合一実現から、やがての8代将軍足利義政期の「応仁・文明の乱」勃発そして山名宗全・細川勝元の没までの年表で、日付までを記載しています。一部不明な月・日付に関しては、「―」で割愛をさせて頂いたり、「この月」などと、表記しておりますのでご了承下さい。

特に重要と思われる事項(歴史的流れのために必要と思われる事件等)などは、太字等で記載しております。

～太陰暦・太陽暦について～

本書での月日の表記は全て和暦を採用しており、一部、西暦の表記とはズレが生じています。

日本では、明治5年12月3日(=明治6年1月1日(西暦1872年1月1日))までは太陰暦(旧暦・天保暦)を、それ以降は太陽暦(新暦・グレゴリウス暦)を使用しています。

そのため、太陰暦である和暦(旧暦・天保暦)の月日と、それに対応する太陽暦である西暦(新暦・グレゴリウス暦)の月日は一致しません。ご注意下さい。

なお、太陰暦(太陰太陽暦)の1年は太陽暦の1年に比べて約11日短く、このズレは3年で約1ヶ月分(約33日)となります。

このため約3年に1度、余分な1ヶ月(閏月)を挿入して1年を13ヶ月とした閏年を設けることで、ズレを解消しています。

なお、閏月は閏〇月と表記し、仮に閏4月があった場合、これは通常の4月の後に閏月(閏4月)が挿入されていることを示しています。

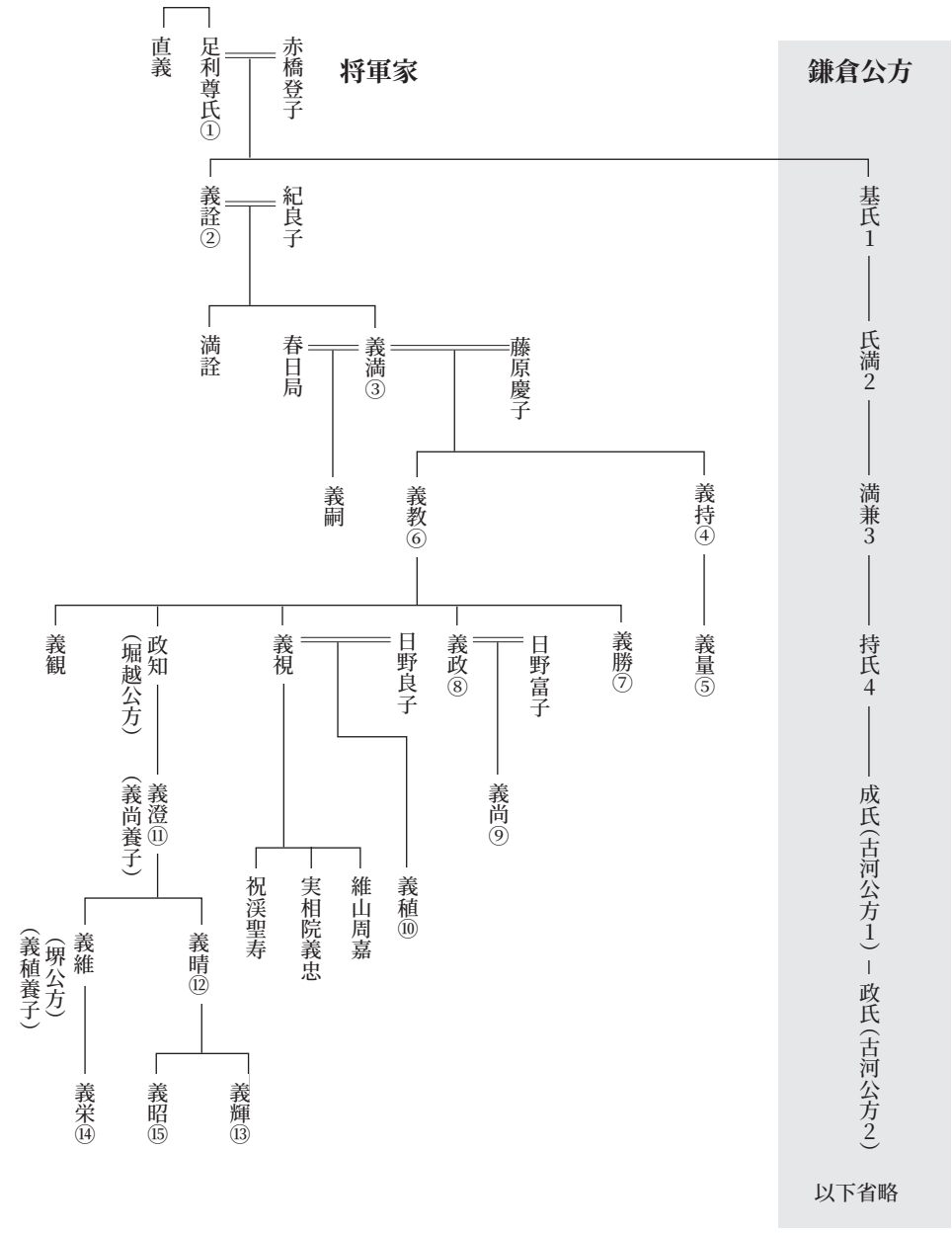
例)「金閣創建」：応永5年4月22日(西暦：1398年5月8日)

西暦 和暦	月日	出来事	No.
明德3/元中9 (1392)	閏10月2 日	公武の一体化を推し進めた 足利義満35歳、南北朝合一を実現 し、58年にわたる朝廷の分裂を終結させる一室町時代がはじまる。	1
明德4 (1393)	1月11日	山名氏之(氏幸)、「明德の乱」で没落した弟・山名満幸の基盤を掌握し伯耆国守護職へ再任。	6
明德4 (1393)	4月26日	義満と対立して後小松天皇に譲位していた後円融上皇、崩御。宝算36。公家による政治は事実上終焉を迎えたという。	10
明德4 (1393)	6月5日	「 斯波義将、管領となる 」。斯波義将(高経の4男)、細川頼元に替り、三度管領に就る。	12
明德5 (1394)	2月6日	南朝の後亀山天皇(第99代天皇および南朝第4代)、惟成親王、天童寺にて初めて義満と面会。	29
明德5 (1394)	6月13日	室町幕府第3代征夷大將軍足利義満の四男春寅(のちの義教)が生まれる。	34
応永1 (1394)	12月17日	室町幕府第3代征夷大將軍・足利義満37歳、將軍職を元服した嫡男義持(九歳)に譲り隠居。だが、実権は掌握したままだった。	44
応永1 (1394)	12月25日	義満、従一位太政大臣に昇進。公家の極官に昇った。義満は、將軍家の実権は手放さず天皇家の権限にも近づいていく。	46
応永2 (1395)	6月20日	義満38歳は出家して、道有(のち天山道義)と号す。	64
応永2 (1395)	7月11日	「義満、明の贈遣を受く、」。太政大臣を辞し、出家した義満は、天皇の臣下ではない自由な立場となった。義満は明との正式な通交を望んでいた。	68
応永2 (1395)	8月―	「幕府、九州探題今川貞世を招還。「了俊の九州探題を罷免」。	74
応永3 (1396)	2月―	渋川満頼の探題就任が九州諸氏に報じられる。4月満頼は赴任し、以降、九州探題は渋川氏が代々世襲していくこととなる。	85
応永3 (1396)	12月―	「大内義弘は少貳氏討伐を命じられた」。大内義弘は、2人の弟である満弘と盛見に5千騎あまりを付けて派遣した。	101
応永4 (1397)	4月16日	「 足利義満の北山第、立柱上棟 」。	107
応永4 (1397)	5月7日	4代管領を務め、摂津国・土佐国・讃岐国・安芸国・丹波国守護の細川頼元、没。享年55。長男の満元が家督を継ぎ細川京兆家8代当主となる。	108
応永4 (1397)	10月―	この月、京から九州へ下向した大内義弘は、少貳氏を破り、翌年早々には上洛したという。	113
応永5 (1398)	4月22日	「 金閣創建 」。「これより先、足利義満、北山第に移徙する、」。	119
応永5 (1398)	―	「茲年相国武家の三職七頭を定む。朝廷の五摂家七清華になぞろふ。三職は斯波、細川、畠山、三管領たり。(執事、別当)七頭は山名、一色、土岐、赤松、京極、上杉、伊勢なり。其内に山名、一色、赤松、京極は都の奉行とす(侍所別当)四職なり」。「応永五年(戊寅)…… 此の年、義満は朝廷の五摂家七清華に准じて武家の「三職七頭」を定めた。	131
応永6 (1399)	5月8日	「義満室藤原慶子卒す、号尊勝鬘院」。義満室・藤原慶子、没。享年42。	149

西暦 和暦	月日	出来事	No.
応永6 (1399)	10月13日	「 応永の乱 」は じまる 。大内義弘は弟の弘茂と共に軍勢を率いて、分国である和泉堺ノ浦に上陸。	160
応永6 (1399)	10月28日	「応永の乱」。「大内義弘、足利満兼の御教書をを奉じ、討幕のため興福寺や児玉国行・同持行ら募兵し与同を求める、」	162
応永6 (1399)	12月21日	「 応永の乱一泉州堺合戦 」 終結 。「堺城陥落し、大内義弘・毛利民部丞ら討死。大内弘茂・厳島社神主親胤は降参」。	184
応永6 (1399)	12月24日	「畠山基国は河内・紀伊を賜い、細川満元は摂津・和泉を賜う」。	185
応永7 (1400)	1月11日	幕府評定始。義持、将軍として初めて着座し公式の活動を開始。	187
応永7 (1400)	6月15日	「鎌倉公方が将軍義満に服す」。	200
応永7 (1400)	7月4日	「今川了俊、室町幕府に降参する」。	202
応永7 (1400)	7月6日	「義満、周防・長門両国の大内盛見方退治のため同弘茂(盛見の弟)を下向させ、益田兼世に合力を命じる」。義満は、大内盛見方退治のため大内弘茂を下向させ、益田兼世には合力を指示した。	203
応永7 (1400)	12月19日	将軍義持15歳、御判始の儀を行う。義持は名目上の将軍にすぎず、幕府政治の実権は依然として義満が握り、自らの花押を据えた文書を発給して、将軍義持が政務を執ることはなかった。	218
応永8 (1401)	5月13日	義満、「日本国准三后源道義」の名義で、同朋衆の僧祖阿と博多の商人肥富とを使節として明に派遣する。三度目とされる今度は、明に受理された。	229
応永8 (1401)	12月29日	「盛見と弘茂の戦いが決着」。大内盛見、長門国府盛山城で弟・大内弘茂を滅ぼす。兄弟間の争いは、西国各地で2年に及んだ。	242
応永9 (1402)	8月16日	「足利義満、島津伊久に命じ、鎮西の賊船の明侵掠を停止させる。義満、明の要請により倭寇を禁止し、鎮圧もした。	257
応永9 (1402)	9月5日	日明国交を正式に樹立し、足利義満は、建文帝より日本国王に冊封される。	259
応永10 (1403)	7月―	この月、大内盛見の防長(周防・長門)守護職、翌年安芸・石見守護職、応永14年4月までには豊前守護職を認め、ようやく室町幕府に帰順させたという。	276
応永11 (1404)	5月19日	山名小次郎(持豊、のちの宗全)生まれる。	290
応永11 (1404)	9月23日	「応永の安芸国人一揆」は じまる 。「安芸国人二十九名、五箇条の一揆契約を結ぶ」。	299
応永12 (1405)	7月25日	「 越前守護斯波義重、管領職に就任する 」。畠山基国に変わり、父義将の庇護のもと、斯波義教(義重)が管領(7代)に就任し、新たに遠江守護を加えられた。	304
応永13 (1406)	1月10日	河内国、紀伊国、能登国、越中国守護の 畠山基国、没 。53歳。嫡男満家が当時、足利義満から疎まれ失脚していたため、家督は次男の満慶が継ぐ。	309

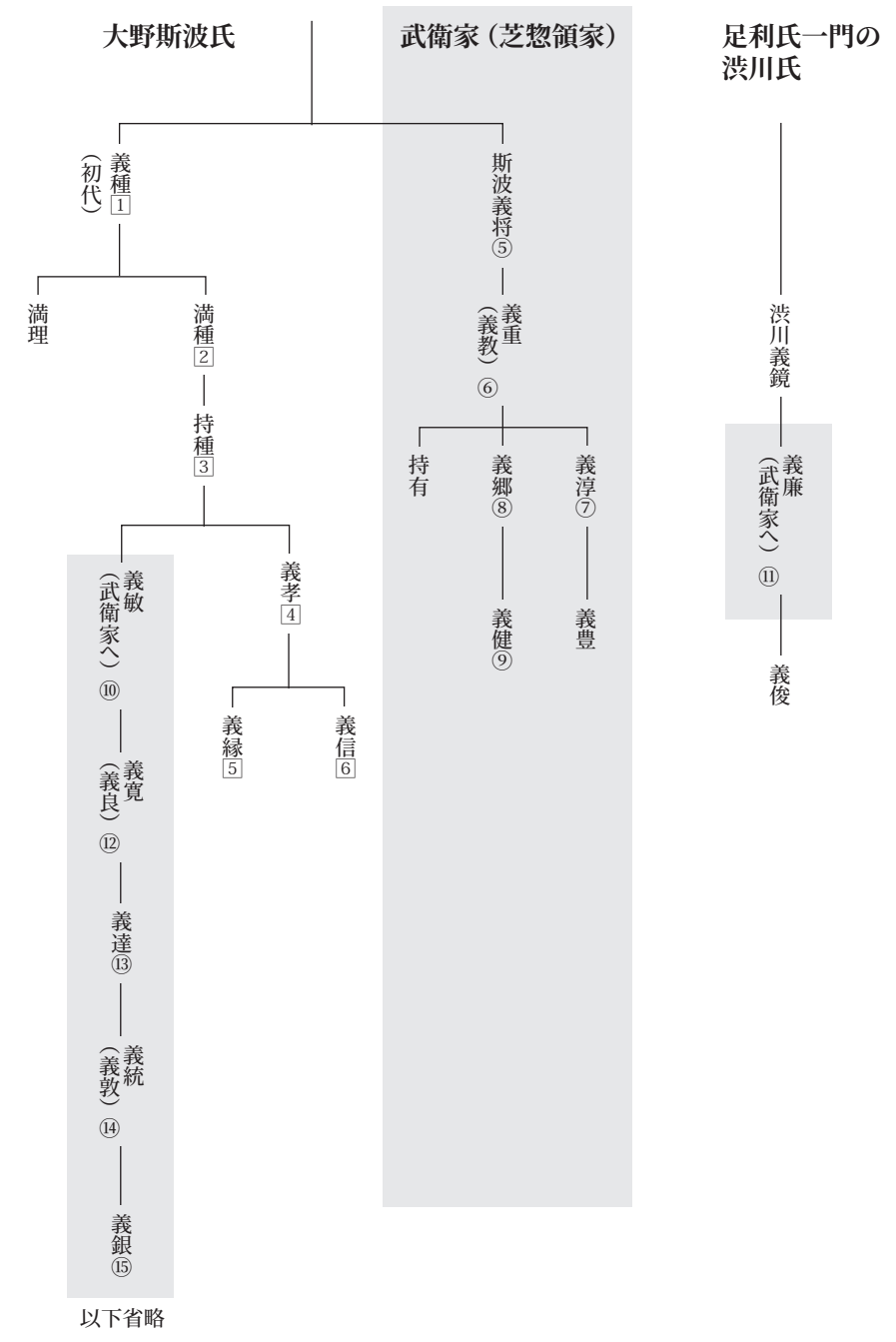
西暦 和暦	月日	出来事	No.
応永13 (1406)	7月30日	「応永の安芸国人一揆」終結。「守護代、安芸国へ下向。この折、毛利光房・平賀弘章ら七名の赦免の御教書を下す」。	327
応永13 (1406)	12月27日	「裏松重光、義満に太上天皇尊号を贈り、室康子を天皇准母として、准三后宣下あるべきことを関白(一条)経嗣に申す、」。「義満室日野康子を准三后に任じる」。	338
応永15 (1408)	3月8日	「 (後小松) 天皇、北山第に行幸する 」。「(後小松天皇)、義満の北山第に行幸、」。この儀式は、義満が上皇として天皇を迎える朝覲行幸に倣い、かつ義嗣を次期天皇として諸人に披露するものであった。	362
応永15 (1408)	5月6日	「義満、申酉刻に薨去す、」。 足利義満、北山第にて没 。享年51(満49歳没)。	373
応永15 (1408)	6月7日	「 義持23歳、足利将軍家の家督を相続し、将軍邸の移転、日明貿易の停止など、名実ともに将軍政治を行う 」。義持(1386～1428)は室町第(花の御所)から北山第に移り、「新御所」と呼ばれる義嗣は北山第から母春日局の屋敷に移る。	376
応永15 (1408)	9月―	畠山満家は、義満が死去し4代将軍足利義持の治世になると、弟満慶から家督を返上され満家が当主となり河内・紀伊・越中3ヶ国の守護となった。	378
応永16 (1409)	2月9日	斯波義教(義重)、管領職を辞す。	387
応永16 (1409)	2月10日	「将軍足利義持、三条坊門第を建てるため北山第を破却し、その遺材を移す」。	388
応永16 (1409)	7月22日	第3代鎌倉公方・足利満兼、没、享年32。長男の幸王丸(のちの持氏)が跡を継ぐ。	397
応永16 (1409)	8月10日	「 斯波義淳、管領職に就任する 」。斯波義将、管領職を孫の斯波義淳13歳に譲る。	400
応永16 (1409)	10月26日	足利義持は、祖父義詮の住居跡に新第を築き、幕府をここに移した。義持新第は、禅宗寺院の構えであったという。義満の遺産である北山第は、義母日野康子の死後、鹿苑寺(金閣)を除いて義持によって破却されたという。	403
応永17 (1410)	6月9日	「 斯波氏主導の幕政体制が終焉 」。「斯波義淳、管領職解任される」。父斯波義教(義重)も政務を離れる。	411
応永17 (1410)	6月―	畠山満家、幕府管領(10代)に補される。	414
応永17 (1410)	11月27日	「後亀山法皇、吉野に出奔」。金剛心(旧南朝の後亀山帝)、突如嵯峨を出奔して吉野に潜幸し、以来ここで6年を過ごす。	417
応永18 (1411)	9月9日	「 明との国交が一時断絶 」。「幕府、明使を兵庫から国外に放逐させる」。	426
応永19 (1412)	4月10日	畠山満家に替り、摂津国・和泉国・土佐国・讃岐国・丹波国守護の 細川満元が室町幕府11代管領に補される。	436
応永19 (1412)	8月29日	「称光天皇践祚、後小松天皇譲位、上皇として院政を開始」。	442

1 足利将軍家・鎌倉公方家略系図 ○数字は将軍代数



2 斯波家略系図

○数字は惣領家当主代数
□数字は大野斯波家当主代数



西暦1392

明徳3/元中9	閏10月2日	「武家として初めて源氏長者となり、淳和院・奨学院両別当を兼任し、准三后の宣下を受け、公武の一体化を推し進めた足利義満35歳（1358～1408）、 南北朝合一を実現し、58年にわたる朝廷の分裂を終結させる一室町時代がはじまる 」。	0001
		「明徳の和約」（南朝が持っている三種の神器を北朝へ渡す、皇位には持明院統（北朝）と大覚寺統（南朝）が交互につく、領地は鎌倉幕府時代に戻すこと）に従って、南朝の後龜山天皇（第99代天皇および南朝第4代）（1350～1424）が吉野からこの日、40人程の供を引き連れ京都大覚寺に帰還して、北朝の後小松天皇（第100代天皇および北朝第6代）（1377～1433）に同月5日三種の神器のみが大覚寺から北朝・後小松天皇の土御門内裏に移され、南北朝合一が実行された。	
	元中	は、南北朝合一に伴って廃止、北朝の元号「明徳」に統一される。	
明徳3	閏10月5日	「神器を渡さる、文治の例により三ヶ夜内侍所臨時御神楽を奏す、義満、聴聞す」。神器は土御門東洞院の皇居の内侍所に鎮座し、五十六年ぶりに皇統は帰一した。	0002
	12月26日	「左大臣徳大寺実時を罷め、前左大臣義満を還任す。」。義満、左大臣に還任。	0003
	12月27日	「是より先、高麗使僧覺鑑来朝して、国書を幕府に呈す、是日、義満、僧絶海をして、高麗に答へしむ。」。 絶海中津（1336～1405）は夢窓疎石に学び、明に渡る。帰国後、たびたび義満とは対立するも、それでも足利義満に信任され、等持寺・北山等持院・相国寺などの住持になる。義堂周信（1325～1388）と共に中国文化に通じた五山文学の双璧といわれる。	0004
	12月－	「足利義満、明徳の乱の死者追善のため、内野で始めての万部経会を営む」（『明徳記』）。内野は、旧平安京の大内裏付近。	0005

西暦1393

明徳4	1月11日	山名氏之（氏幸）（?～?）、 「明徳の乱」で没落した弟・ 山名満幸の基盤を掌握し伯耆国守護職へ再任 。4日とも。氏之は、以後応永年間末期まで約30年間在職した。	0006
	1月17日	「幕府的始、屋代師国等、射手を勤む。」。 幕府的始は、鎌倉時代から行われ、室町期には例年正月17日となったようだ。ちなみに江戸期は正月11日であった。	0007
	2月5日	山名満幸・塩冶遠江入道、出雲国三刀屋代に押寄せ合戦。城主須和部菊松丸、満幸等を追い払う。	0008
	4月11日	「義満、河野通義をして、伊予の軍勢を伯耆に出し、山名氏之（氏幸）を援けしむ、」（『白杵稲葉文書』）。 義満は、伊予守護職河野通義（1370～1394）をして、伯耆守護山名氏之（氏幸）を助けるよう命じる。	0009
	4月26日	義満と対立して後小松天皇に譲位していた後円融上皇（1359～1393）、崩御。宝算36。崩御直前に落飾して法名を「光浄」と称した。後円融帝と足利義満とは従弟同士であった。公家による政治は事実上終焉を迎えたという。	0010
	5月18日	「將軍足利義満、若狹を訪れる」（『税所次第』）。『若狹國守護職次第税所今富名領主次第神宮寺舊記合本』。 義満は諸大名や愛妾の西御所（高橋殿）らを伴って、一色領の丹後九世戸に参詣したあと若狹に入り、高浜の名勝矢穴を見物して小浜に着く。義満の宿所には玉花院があてられ、一行は中一日さまざまな遊びを楽しんだという。	0011

西暦1393

明徳4	6月5日	「 斯波義将、管領となる 」（『執事補任次第』）。 管領は將軍を補佐し、幕府の政務全般を掌握する要職で初めは執事と称されていた。斯波義将（高経の4男）（1350～1410）、細川頼元（1343～1397）に替り、三度管領に就る。斯波氏5代当主・義将は生涯において執事・管領職を5回、延べ18年にわたって幕政を主導した。 細川京兆家7代当主・頼元以後、細川京兆家は三管領の一つとして室町幕府の管領を務める家柄となり、当主は従四位下右京大夫に代々任ぜられるようになる。細川当主は歴代右京大夫を名乗っていたので、右京大夫の唐名である「京兆家」と呼ばれた。	0012
	6月24日	「炎旱により祈雨のため、足利義満、地藏院僧正道快により仏舍利を神泉苑に納め祈雨させる」。（『東寺王代記』）。	0013
	6月24日	「相国寺七重塔塔立柱される」。（『相国寺諸回向井疏』）。「相国寺大塔立柱、義満疏を納む」。疏は文書。相国寺八角七重塔供養は、応永6年（1339）9月15日に行われた。	0014
	6月29日	「足利義満、東寺に七壇水天供を修する」（『三宝院文書』）。	0015
	7月8日	「京都妙顕寺、号を妙本寺と改む、是日、義満、僧日霽をして、同寺敷地として、押小路以南、姉小路以北、堀川以西、猪熊以東の地を知行せしむ、」。足利義満により三条坊門堀川の地を寄進される。移転すると共に、叡山の干渉があり、「妙本寺」と寺名を改めて再興したという。	0016
	8月11日	「左大臣義満に隨身兵仗を賜ふ、」。隨身兵仗は、護衛兵を召し連れること。	0017
	8月16日	「義満、北野社に参寵す、」。	0018
	8月22日	「南禅寺全焼、殿堂・門廡・鐘楼・南禅院・仏殿・法堂・金剛堂・大雲庵など焼亡。直実金剛焼失」（『天下南禅寺記』）。	0019
	9月17日	「義満、左大臣を辞す、」。	0020
	9月18日	「義満、伊勢大神宮参詣、是日、京都を發す、」。幕府からの懷柔策で旧領を安堵された北畠顯泰（1361？～1414？）は、伊勢参宮途次の將軍足利義満を招宴し、長男親能が偏諱を賜って「満泰」と改名した。	0021
	10月19日	「義満、犬追物を和泉堺浦に行ふ、二十一日も行ふ、」。犬追物は、鎌倉時代から始まったとされる日本の弓術の作法・鍛錬法。流鏑馬、笠懸と共に騎射三物の一つ。笠懸は、疾走する馬上からの鏑矢を放ち的を射る、日本の伝統的な騎射の技術・稽古・儀式・様式のこと。	0022
	10月28日	「義満の子十二歳、尊道親王の弟子となり出家す、尊満と名づく、」。青蓮院門跡尊道入道親王（1332～1403）に弟子入りした尊満（1381～1403？）は、義満の庶長子で、義持（1386～1428）の異母兄である。	0023
	11月2日	「河内守護畠山基国（1352～1406）および同守護代遊佐長護（国長）（?～1413）、將軍義満の御教書を以て伊香賀郷地頭職を進士三郎貞吉に渡付する」（『土屋家文書』）。	0024
	11月26日	「 洛中刃土散在土倉并酒屋役条々 」。幕府、洛中洛外の土倉・酒屋役の制を定める。室町幕府は、社寺本所がその支配下の酒屋・土倉に独占的に課税する権利を否定して、幕府の徴税権に服すべきことを規定した。幕府は土倉らを支配下に入れる。高利貸しである土倉や酒屋の年間六〇〇〇貫文の賦課を定めた税金は、室町幕府の貴重な財源となる。	0025
	12月13日	「 義満、大内義弘の忠節を褒して一族に准ぜしむ、 」。 義満は「明徳の乱」・「南北朝合一尽力」など一連の功績・忠節を認めて、周防・長門・石見・豊前・和泉・紀伊守護の大内義弘（1356～1400）に足利將軍家に準じる事を認める御内書を發した。	0026

西暦1393

明德4	12月25日	「義満、吉田兼熙をして、山城平野社を造営せしむ、」(『平野社文書』)。 吉田兼熙(1348～1402)は、卜部氏17代・吉田家家祖。吉田卜部氏中興の祖とされる。	0027
-----	--------	---	------

西暦1394

明德5	1月18日	「義満、北野社に七ヶ日参寵す、」。	0028
	2月6日	「後亀山上皇および惟成親王、天龍寺に御幸し、初めて義満と対面す、」。南朝の後亀山天皇（第99代天皇および南朝第4代）(1350～1424)、惟成親王、天竜寺にて初めて義満(1358～1408)と面会。	0029
	2月23日	南朝の後亀山天皇、「不登極帝（即位しなかった天皇）」として太上天皇（上皇）の尊号を贈られる。	0030
	2月28日	「義満、石清水八幡宮に詣す、」。義満が石清水八幡宮に社参したのは24回といい、その中参籠1回　他代参1回（細川頼元）。室町幕府は初代將軍の尊氏以来、源氏の氏神である石清水八幡宮（京都府八幡市八幡高坊）に多くの土地を寄進している。	0031
	3月12日	「義満、南都下向（三度目）、供奉公卿五人殿上人十一人、その装束田楽猿楽の如し、」。3月18日、帰洛。	0032
	4月19日	「義満、因幡津井郷を、但馬円通寺に寄付す、」。円通寺（兵庫県豊岡市竹野町須谷）である。	0033
	6月13日	「 義満の子義教 生る、」。室町幕府第3代征夷大將軍足利義満の四男春寅（のちの義教）(1394～1441）が生まれる。母は側室の藤原慶子（1386～1428）。幼名は。兄には尊満（1381～1403？）、宝幢　若公（1385～1387）（二人の母は側室加賀局）、同年將軍となった義持（母は藤原慶子）(1386～1428)がいた。	0034
明德5/ 応永1	7月5日	「 応永 改元、義満洪武の号を挙げしむ、」。疫病(疱瘡)の流行により、 明德 より「 応永 」に改元。 將軍足利義満(1358～1408)は若い頃から明へ深く憧れており、「明德」からの改元の議の際に明の太祖洪武帝(1328～1398)の治世にあやかって日本の元号にも「洪」の字を使うよう工作した。そこで、東坊城秀長は「洪徳」、「洪業」、「洪化」の3案を義満に提示したところ、義満は「洪徳」を選定した。しかし、「洪徳」は以下の理由で公家たちが反発したため実現せず、結局「応永」に決定した。一条経嗣は強く反対したという。「洪」の字は洪水につながる。これまで永徳、至徳、明德と「徳」の字がつく元号が連続しており、3回連続「治」のつく元号(天治、大治、永治)を用いた崇徳天皇や、5回連続「元」のつく元号(元応、元亨、元徳、元弘、延元)を用いた後醍醐天皇の例と同じになり不吉であるとした。反発する義満は、自分の生きている間には元号を変えさせなかった。そのため、応永年号は明治以前では最も長い元号となった。	0035
応永1	8月11日	「幕府、尾張守護今川仲秋をして、尾張小田井莊關所分を義満夫人日野康子の代官に渡付せしむ、」。義満側室・日野康子(1369～1419)は、日野資康の娘で正室葉子の姪で、応永の初め義満に嫁したとされる。 義満以降、日野家は代々足利氏の正室を出す姻族となり、広橋家は義満の叔母・崇賢門院広橋仲子（後光厳配偶）(1339～1427)の縁から足利氏と結びつき、幕府の中樞に参画した家である。いずれも、持明院統の一流である後光厳天皇の血筋と深い関係にあり、公家と武家とを結びつける役割を果たしていた。	0036
	9月11日	足利義満、日吉社に参詣。細川頼元(1343～1397)、畠山基国(1352～1406)、京極高詮(1352～1401)、六角満高(1365/1369～1416)らの諸大名が供奉。14日還座。	0037

西暦1394

応永1	9月24日	「相国寺焼亡、夜、丑・卯刻、諸堂・寮舎焼失」。「相国寺焼く、義満鹿苑院に到る、絶海中津祇園精舎・径山の例を引き再建を勧む、」。直歳寮から出火、伽藍ことごとく灰塵に帰す。等持院よりかけつけた絶海中津は相国寺が焼失すると、義満を励ましその復旧に努めた。明德3年（1392）8月28日に落慶供養が盛大に行われた、わずか2年後であった。	0038
	11月1日	相国寺仏殿と山門再興の事始が行われる。	0039
	11月7日	「義満、伊予守護河野通義の請に依り、弟通之をして、同国守護職及び本知行分を安堵せしむ、」(『予章記』)。 河野通義（1370～1394）は、8月になって京都において突如病に倒れた。通義の室は懷妊中であつたために、弟の通之（?～1415）に対して生まれた子が男子であればその子が16歳に達した時に後を継がせることを条件に11月10日家督を譲った。通義は同年11月16日没。26歳。	0040
	11月10日	「河野通義、伊予国守護職・知行地を弟通之に譲る」(『長州河野文書』)。	0041
	11月24日	「 山名満幸 拳兵の報あり、この日赤松義則、之を討つため、美作に進發する」。侍　所別当の赤松義則(1358～1427)である。	0042
	11月28日	相国寺仏殿山門立柱。	0043
	12月17日	「 義満、征夷大將軍を辞す、義持元服し、正五位下に叙せられ、征夷大將軍を宣下せらる、 」。室町幕府第3代征夷大將軍・足利義満37歳(1358～1408)、將軍職を元服した嫡男義持（九歳）(1386～1428)に譲り隠居。だが、実権は掌握したままだった。義持は、正五位下左近衛権中将に叙任。元服奉行は大納言・万里小路嗣房（1341～1401）、理髪役は右大弁宰相日野重光（1370～1413）、加冠役は義満、將軍宣下の上卿は権大納言・日野資教(1356～1428)であった。	0044
	12月18日	「義満、大友親世をして、豊後守護職を安堵せしむ、」。幕府に仕えて功績を挙げた大友親世（?～1418）である。	0045
	12月25日	「 義満を太政大臣に任ず、身兵仗を賜る 」。義満、從一位太政大臣に昇進。 公家の極官に昇った 。 武家が太政大臣に任官されたのは、平清盛に次いで2人目。そして征夷大將軍を経験した武家が太政大臣に任官されたのは初めてであり、かつ、後の時代を含めても義満が足利家唯一の太政大臣となった。義満は、將軍家の実権は手放さず天皇家の権限にも近づいていく。	0046
	12月25日	「義満、前関白二条師嗣に勸めて太閤と称せしむ、」。二条師嗣(1356～1400)である。	0047
	－	義満五男・鶴若丸(のちの足利義嗣)(1394～1418)が生まれる。母は、幕府評定衆摂津能秀の娘・春日局。同年生まれの春寅丸(後の足利義教)(1394～1441)とともに僧侶となることが予定されており、梶井門跡(三千院)に入室する。	0048

西暦1395

応永2	1月7日	「足利義満の太政大臣拜賀式」。	0049
	2月24日	「相国寺仏殿立柱、義満、立柱の疏を遣る、」。仏殿、崇寿院（開山堂）の立柱式が挙行される。	0050
	2月25日	「義満、伊勢大神宮に詣す、三十日帰京、」。義満は歴代將軍として初めて明德4年（1393）に参宮し、その後10回も参宮しているという。	0051

応永2	3月10日	「侍所別当京極高詮、前丹後・伯耆・出雲・隠岐守護山名播磨守満幸を京都五條坊門高倉の宿に誅する」。元中8年(明德2年(1391)12月の「明德の乱」首謀者の一人、剃髪して僧になり九州の筑紫まで落ち延びていた山名満幸、京都の五条坊門高倉に潜伏していたところを京極高詮(1352~1401)の手により捕らえられ、斬殺された。満幸の死により再び嫡流の師義流から、時義流の時熙(1367~1435)およびその子孫に山名氏惣領権が移り、但馬守護職を得る。山名氏は明德の乱で没落したが、時熙の代で勢力を取り戻す。大内氏対策であろうが、応永7年因幡守護山名氏家は帰参を許され、石見守護に氏利が、応永11年安芸守護に満氏が、応永19年従弟で猶子となった熙高が因幡守護を継ぎ、時熙の備後・伊賀と、氏之の領国伯耆と合わせて7ヶ国の領有を果たすことになる。山名氏の家督は時熙の家系が受け継いでいった。時熙の子が、満時、持熙、持豊(宗全)らである。	0052
	3月10日	「義満、常在光院に詣す、この日、山名満幸、かつての家人多賀某のために誅さる、室町殿で首実検す、」。常在光院は、現在の知恩院辺りに在った。	0053
	3月20日	「義満、山名満幸誅賞として出雲隠岐両国守護職及び關所分を、京極高詮に宛行ふ、」。義満、山名満幸誅罰の賞として、出雲・隠岐両国守護職および關所分を侍所頭人・京極高詮(1352~1401)に宛行。高詮は、出雲へは亡き弟・尼子高久(1363~1391)の子・持久(1381~1437)を守護代として派遣し、その子孫は戦国大名の尼子氏となる。	0054
	4月15日	「義満の子尊満受戒す、」。義満庶長子・尊満(1381~1403?)が受戒する。尊満母は、側室加賀局。受戒とは、仏門に入るため仏弟子として戒律を受けること。	0055
	4月17日	「義満、南都に下向(第四度)、興福寺東大寺春日社に詣す、」。	0056
	4月22日	「出家を止められんとして室町第に非常行幸あり、義満仁和寺等持院に隠る、」。義満出家を止めるべく、後小松天皇(1377~1433)の室町第非常行幸があった。	0057
	4月25日	「義満、出家せんことを奏請す、」。	0058
	4月29日	「洛中下京四条・五条・六条・七条等が焼亡する」(『永承三年高野御参詣記裏書』)。	0059
	5月9日	「義満、若狹・丹後に遊び、天橋立等を観る、」。義満の度々の遠出旅行は、大名を威圧するためという政治的な事であったともされる。	0060
	5月11日	「管領斯波義將および同義重の第が炎上する」(『荒暦』)。	0061
	5月22日	「神護寺が破却される」(『東寺王代記』)。	0062
	6月3日	「任大臣節会、太政大臣義満を罷む、併せて小除目叙位を行ふ、」。「義満太政大臣を辞す」。室町幕府第4代征夷大将軍足利義持(1386~1428)、従四位下に昇叙。左近衛中将兼任如元。	0063
	6月20日	「義満室町殿北御所にて出家す、戒師空谷明応、剃手絶海中津、」。義満38歳は出家して、道有(のち天山道義)と号す。この出家は、征夷大将軍として武家の太政大臣・准三后として公家の頂点に達した義満が、残る寺社勢力を支配する地位をも得ようとしたとされ、世俗との縁を断って仏門に入るためではなく、世俗を離れて武家や公家をも超越した存在として君臨するためのもので、その先例を平清盛に求めたものとされる。自らが將軍家の「上皇」として、幕府政治「院政」を行い、また天皇の臣下ではなく「日本国王」として対中国外交を行うためともいう。この年生まれた義嗣への旨愛も大きく作用したという。義満の出家に際して、斯波義將、同義種、大内義弘、京極高詮、赤松義則をはじめ多くの武家や、左大臣の花山院通定をはじめ多くの公家、皇族の常盤井宮満仁親王まで追従して出家している。	0064

応永2	6月26日	「参議左大弁日野西資国、義満の寵愛せる今参局鴨光冬女に通じ、解官さる、正親町三条公敦その闕に補す、」。日野西資国(1365~1428)が解官、正親町三条公敦(?~1409)が補任された。	0065
	7月2日	「義満、出家後初めて管領義將の第に莅み、諸大名を引見す、」。	0066
	7月3日	「是頃日野西資国ほか今参局に通じたる殿上人を糾弾し、罪科に処すとの風聞あり、また大乘院孝尊を佐渡国に流すとの説あり」。	0067
	7月11日	「義満、明の贈遣を受く、」。太政大臣を辞し、出家した義満は、天皇の臣下ではない自由な立場となった。義満は明との正式な通交を望んでいた。	0068
	7月23日	管領斯波義將(1350~1410)が、在職のまま出家して「道将」と号す。その2日後には正四位下に昇叙し、左兵衛督から右衛門督に遷任。武士で初めてとなる。先に、義將は官途名「左兵衛督」を名乗り、この官途名が代々斯波氏に受け継がれたので、兵衛府の唐名、武衛に因み「武衛家」と呼ばれた。	0069
	7月24日	「義満、上杉憲定を伊豆・上野両国守護職に補し、父憲方の遺跡を安堵せしむ、」。上杉憲定(1375~1413)、父の遺領と伊豆・上野の守護職を継ぎ、山内上杉氏の当主となる。	0070
	7月26日	「義満、出家の後、始めて参内す、」。	0071
	閏7月一	幕府、今川了俊(貞世)に上洛の命を下す。大内義弘と大友親世の讒言によるものと了俊は記す。	0072
	8月15日	「斯波氏重臣甲斐教光の子将教、將軍足利義満から(越前国)足羽郡大土呂・稲津保・河北などの所領を安堵される」(『醍醐寺文書』)。甲斐氏は室町幕府が成立し、斯波氏が越前守護となった頃にその執事として入京。甲斐教光が徐々に頭角を現し、娘を斯波義重(のち義教)に差し出して斯波義郷を生ませ、その立場を強固なものとし、教光と子の甲斐将教は「義教」に改名した義重から偏諱(「教」の字)を与えられた。また、将教は越前・尾張・遠江の守護代となり、その後甲斐氏が越前・遠江の両守護代職を世襲するようになる(尾張守護代は織田氏が世襲するようになる)。将教(?~1420)の子将久(常治)(?~1459)の代となって最盛期となり、陪臣でありながら、將軍の出行を得られるほどにその家格は高かった。	0073
	8月一	「幕府、九州探題今川貞世を招還(『難太平記』)。「了俊の九州探題を罷免」。室町幕府から派遣されていた九州探題今川貞世(了俊)(1326~1420?)が上京し、解任される。九州探題赴任中は備後、安芸、筑前、筑後、豊前、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩の守護も兼ねた。しかし応安4年(1371)10月頃から24年の長期にわたる了俊の探題在任は、最後は九州経営の崩壊を招き、了俊を支持した將軍足利義満が決断したという。了俊は九州探題を罷免された後、遠江と駿河の半国守護を命じられ、それぞれ弟の仲秋(?~?)、甥の今川泰範(1334?~1409?)と分割統治する事となった。後任の九州探題として渋川満頼(1372~1446)が任命される。	0074
		大内義弘は、瀬戸内海の交易権では細川氏と対立しつつも、九州探題を解任された今川貞世(了俊)に代わって、朝鮮や明とも独自の貿易ルートを確保し、畿内から中国、九州へと勢力を大きく拡大する。	
	9月14日	「義満、南都に下向す(第五度)、二十日帰京す、」。	0075
	9月16日	「義満、東大寺に受戒す、」。法皇受戒の儀式に倣ったのものであったという。	0076

西暦1397

応永4	1月5日	將軍義持、從三位に昇叙。參議左近衛中将如元。	0105
	3月29日	將軍義持(1386～1428)、權中納言に転任。	0106
	4月16日	「足利義満の北山第、立柱上棟」(『武家年代記』)。義満は寢殿の造営に着手し、各大名に応援を頼むが、義弘は「武士は弓矢持ってこそ武士」とこれを拒否。「応永の乱」のきっかけとなったという。この年、義満は、西園寺家から、河内の領地を交換に京都北山の「北山弟」を譲り受け、舍利殿(金閣)を中心とする山荘(「北山第」または「北山殿」、後の鹿苑寺)を造営した。	0107
	5月7日	4代管領を務め、摂津国・土佐国・讃岐国・安芸国・丹波国守護の細川頼元(1343～1397)、没。享年55。長男の満元(1378～1426)が家督を継ぎ細川京兆家8代当主となる。	0108
	7月2日	「義満、京都塩小路の地一町を、山城蓮華寺に寄進す、」。洛北蓮華寺(京都市左京区上高野八幡町)の旧地は、下京区、西八条塩小路(七条塩小路とも)付近にあり、方一町の寺地を有し、西来院という院号だったという。当初は時宗だった。	0109
	8月5日	「義満、使を明に遣すといふ、」。「日本准三后源道義、書を大明皇帝陛下に上る」と記したという。	0110
	9月7日	「義満、相国寺に大和元興寺の鐘を懸く、」。義満、元興寺の鐘をひいて相国寺鐘楼にかける。	0111
	10月2日	「義満、南都に下向、春日社に詣す、四日帰京す、」。	0112
	10月ー	この月、京から九州へ下向した大内義弘は、少貳氏を破り、翌年早々には上洛したという。	0113
	11月27日	後亀山上皇、尊号及び兵仗を辞す、義満、請文を献ず、」。後亀山太上天皇(上皇)(1350～1424)、尊号および兵仗を辞退し、義満もこれを了承。その後は出家を遂げて「金剛心」と号し、ひたすら隠遁生活に入る。それでも、阿野実為・公為父子や六条時熙など、わずかな公家が側近として仕えており、吉田兼熙・兼敦父子が神道を進講することもあった。	0114

西暦1398

応永5	1月5日	將軍義持、正三位に昇叙。權中納言如元。	0115
	1月13日	崇光上皇(北朝第3代天皇)(1334～1398)、伏見殿で崩御。宝算65。義満は伏見殿を没収するが、翌年、伏見殿は伏見宮家に返却される。	0116
	2月23日	「義持、大内義弘の邸に莅む、」	0117
	2月25日	「義満、中山親雅の許に渡り、女性を召して酒宴荒淫、北野参籠の後、連夜なり、」。義満の酒宴荒淫は、家礼、公卿の中山親雅(1353～1402)邸である。	0118
	4月22日	「金閣創建」。「これより先、足利義満、北山第に移徙する、」(『在盛卿記』)。義満(1358～1408)、西園寺家から京都北山の「北山弟」を譲り受け、昨年から造営の北山殿に移る。当初から南と北の両御所があったようだ。この時代の文化を、武家様・公家様・唐様(禅宗様)が融合した「北山文化」と呼ぶことも多い。また北山文化の芸能である猿楽では、義満は観阿弥・世阿弥父子を庇護した。もとは、代々公家の西園寺家の所有だったが、後醍醐天皇をここに招き、天皇暗殺計画は発覚。西園寺家当主だった公宗は建武2年(1335)8月2日に処刑され、財産も没収し北山弟は荒れ果てるが、將軍の義満は河内の所領と北山弟を交換し、修復改装させて北山弟(北山殿)を建立したとされる。遺言によって北山第は寺となり、義満の法号を寺号として鹿苑寺(金閣寺)と呼ばれた。	0119

西暦1398

応永5	閏4月23日	「基国の就任とともに、足利氏の有力な一族である細川・斯波・畠山の三氏が管領を交替で独占するようになった」。「管領義将を罷め、畠山基国を補す、」。	0120
		三度なった斯波義将(1350～1410)が管領を辞す。越中・能登の守護畠山基国(1352～1406)が6代管領に就任。侍所頭人・山城国守護も兼任する。	
	5月26日	崇光院流の伏見宮榮仁親王(1351～1416)が、更なる皇統の分裂を避けるべく、義満によって出家に追込まれる。法名は通智。同年8月に洛北萩原殿に移る。崇光上皇が崩御し、榮仁親王は最大の後ろ盾を失った。	0121
	5月27日	今川貞世(了俊)(1326～1420?),在京する。	0122
	6月7日	「義満、高詮の棧敷にて祇園祭御興迎を見物す、」。京極高詮(1352～1401)の棧敷である。	0123
	6月19日	「義満、道意(今年道基より改名)を請じて五壇法を室町第に修す、」。園城寺長吏・道意(1354/1358～1429)である。	0124
	7月7日	「義満、結城満藤の宅で七夕の花会を行う、」(『吉田家日次記』)。義満の恩顧を受け、側近中の側近、前山城国守護・結城満藤(?～?)は許されていた。	0125
	7月10日	「吉田兼敦、大内義弘の許に向かい、鎮西合戦の勝利を賀す、」。京都吉田神社の祠官・吉田兼敦(1368～1408)である。	0126
	7月16日	「長講堂にて後深草院遠忌を修す、但し後小松天皇関知せず、義満沙汰す、」(『吉田家日次記』)。「吉田家日次記」は、室町時代の神祇官人・吉田神社祠官である吉田家当主の手に成る日記の総称。すなわち、吉田兼熙の『兼熙卿記』、兼敦の『兼敦朝臣記』、兼致の『兼致朝臣記』、兼右の『兼右卿記』の四日記を指す。	0127
	8月7日	5月14日薨去した直仁親王(後光厳院流光厳天皇の第二皇子)(1335～1398)の子息が、義満の猶子として勧修寺に入室。勧修寺は、その後も南朝後胤などの受け皿として機能していく。	0128
	8月24日	「足利義満、安曇郡住吉庄及び春近領を小笠原長秀に還付す、」。	0129
	8月ー	「是月　大内義弘、書を朝鮮に復し、物を贈る、朝鮮、秘書監朴敦之を回礼使として、義弘の使に従はしめ、且物を幕府に贈る、敦之、帰国せんとす、義満、義弘をして、修交の意を伝へしむ、」。	0130
	ー	「茲年相国武家の三職七頭を定む。朝廷の五摂家七清華になぞろふ。三職は斯波、細川、畠山、三管領たり。(執事、別当)七頭は山名、一色、土岐、赤松、京極、上杉、伊勢なり。其内に山名、一色、赤松、京極は都の奉行とす(侍所別当)四職なり」。「応永五年(戊寅)……此の年、義満は朝廷の五摂家七清華に准じて武家の「三職七頭」を定めた。いわゆる三職は斯波・細川・畠山で三管領(執事別当也)と号す。七頭とは山名・一色・土岐・赤松・京極・上杉・伊勢らで、そのうち山名・一色・赤松・京極を京都奉行(侍所別当)とし四職と号す。奏者は伊勢貞行である。また武田・小笠原の兩人を弓馬礼式奉行とし、吉良・今川・渋川らを武頭とする」(『南方紀伝』)。	0131
		義満、三管領・七頭・四職の制を整備。また、探題職を設けた。探題職は、九州探題として渋川満頼、奥州探題に斯波(大崎)詮持を任命したという。「南方紀伝」は、南北朝時代における南朝の盛衰とその後胤(後南朝)を扱った史書・軍記。江戸時代前期の成立とみられるが、作者は不詳。	

本書(上巻)は、明德3年(1392)閏10月の3代将軍足利義満の「南北朝合一」にはじまり、「応仁・文明の乱」最中の文明5年(1473)の西軍大将山名宗全と東軍大将細川勝元の没までを時系列で記しました。その間の出来事は、カバー記載の項目や目次年表を参照下さい。

応仁元年(1467)に発生し、文明9年(1477)までの約11年に及んだ「応仁・文明の乱」は、やはり義政の強引な施策が端緒であった。
文正1年(1466)7月、三管領の一つ、斯波氏のお家騒動に、また事件が起こる。8代将軍足利義政は側近の伊勢氏らの進言で斯波氏(武衛家)の家督を義廉から義敏にすげ替えた。山名・一色・土岐氏らは反発、細川氏も批判的であった。義政子・義尚の乳人伊勢貞親は、さらに義政後継の義視(義政の弟)を讒言して排除しようとした。ここにきて、細川勝元・山名宗全らは共同歩調をとり、伊勢氏ら義政側近を追落とした。しかし、翌年の三管領の一つ、畠山家の勢力争いでは義政は山名氏に肩入れし享徳3年(1454)から続く「畠山氏のお家騒動」に介入、畠山当主で管領の畠山政長を罷免し、畠山義就を当主に据えた。義就を支持する宗全と政長を支持する勝元の対立は激化する。義政は山名、細川両人両方(義就、政長)合力を止めさせる。追い詰められた政長はその第を自焼、上御霊社で義就と戦い、賊軍となる。勝元は動き出すが、義政は義就側支持を鮮明にし、山名側の武力を頼み、細川一門の権力を削ぎ、先の近臣政治の復活を図る。応永1年(1467)5月細川・山名両氏は、各与党を京都に招集する。東側が細川京兆邸、西側が山名邸、そして東軍と西軍の本格的戦い「上京の戦い」が勃発する。

巻頭には日本の全体図や都中心の近畿の地図や、各家の家督継承の略系図を掲載しております。参照いただいて、戦いの位置関係や、争乱と下剋上の武士たちの関係理解の一助となれば幸いです。主な主要参考図書は、下巻P222に記載しました。

『下巻』は、文明5年(1473)12月の「義尚、9代将軍宣下」等からはじまります。

編集にあたり、「下巻」掲載の主要参考図書や国立国会図書館デジタルコレクション、東京大学デジタルコレクション、国の公式WEB、各自治体・各大学・各団体WEB等、大いに活用させていただきました。しかし、資料による違い、異説、物語などあらゆる事項があり、すべては、弊社の編集責で掲載しております。

最後になりましたが、ご協力いただきましたスタッフの皆様に、厚く御礼申し上げます。

義満の幕府権力確立、そして11年に渡る「応仁の乱」、農民・仏門「一揆」&無頼「足軽」が初登場

室町時代年表帖 上巻(全2巻)

第1版第1刷

発行日 2025年7月1日

デザイン 岩崎宏

編集・制作補助 ユニプラン編集部

橋本豪

発行人 橋本良郎

発行所 株式会社ユニプラン <http://www.uni-plan.co.jp>
(E-mail) info@uni-plan.co.jp

〒601-8213 京都市南区久世中久世町1丁目76

TEL(075)934-0003 FAX(075)934-9990

振替口座/01030-3-23387

印刷所 株式会社ファインワークス

定価はカバーに表示してあります。

ISBN978-4-89704-627-3 C0021